

《ジェネラリスト BOOKS》 高齢者診療の極意

木村 琢磨 著

＜書評者＞ 大滝 純司（東京医科大学兼任教授・医学教育学/総合診療科，
国立療養所多磨全生園）

数年前からハンセン病療養所で非常勤医師として勤務する機会をいただいています。入所されている方の平均年齢はおよそ90歳で、ハンセン病は全員がすでに治癒しており、診療はいわゆる multi-morbidity への対応が中心です。想像を絶する過酷な人生を歩んでこられた方のケアに携わることから得られる学びはとても多いのですが、超高齢者の診療の難しさをいつも実感しています。

本書の著者である木村琢磨氏は、国立病院や大学で高齢者への診療や在宅ケアに従事しながら、その特徴について発信しつづけておられます。これまでに『日本医事新報』や『Medical Tribune』に連載された内容を再構成して書き下ろしも追加したという本書には、高齢者を診る際の、エビデンスはもちろんですが、実践に裏付けられた知恵や工夫が数多く明示されています。

例えば「慢性疾患の治療目標の設定」の項では、併存疾患のうち

短期間で生命予後を規定し得る疾患を見立てることから始めるよう勧めています。高齢者の診療では、問題点の多さと複雑さに目を奪われて絨毯爆撃的な過剰診療に陥ったり、何から手をつけてよいかわからず途方に暮れたりします。本書ではベテラン医師と中堅医師の対話形式をとりながら、この複雑系の中での取捨選択のノウハウが、わかりやすい具体例を交えながら多くの引用元と共に示されています。

診断学の教育にかかわることが多かった私から見ると、基本的な医療面接や身体診察に加えて、高齢者の診療で注目すべき情報収集のポイントが詳しく紹介されていることにも感銘を受けました。列挙すると、「急に元気がなくなった」「風邪をこじらせないために」「食欲不振には幅広い情報収集を」「足をみる意義と実際」「めまい・ふらつきは複雑な背景を解きほぐそう」「しびれは生命・機能予後や分布パターンを」「在宅医療で

何をみるか」といった項目です。

高齢者は併存疾患が多く、生物学的な面でも心理・社会・倫理的な面でも個人差が大きく、教科書的な症候や病態の方は少ないと感じています。そのため多忙な日常診療の中では、時間に追われて独りよがりな判断になりやすいと自戒しています。この本で例示されているように、不確実性を前提として意識しながら、しかしそれを言い訳にするのではなく、一歩ずつ前に進むような地に足をつけた診療を心がけることが大切なのだとあらためて認識することができました。高齢者を診ることの難しさを感じている医療者に、そしてこれから高齢者の継続的な診療や在宅ケアにかかわろうという皆さんにもお薦めします。

● A5 頁296 2022年10月
定価：4,400円
（本体4,000円＋税10%）
[ISBN978-4-260-05027-2]
医学書院刊